

礎となった3年間

台湾・台北日本人学校（1994-1996 派遣）

下関市立江浦小学校 藤井 智寛

1 はじめに

今回この原稿依頼を受けた際、どういった内容で書けばよいかと随分悩みました。それというのも、私が台北日本人学校へ赴任したのは平成6年度から平成8年度までで、帰国してから20年以上が経っています。その後も、台湾を訪れたのはもう15年前に一度あるだけです。私が目にした台湾と今とでは国内の様子もかなり変わっていますし、国際情勢も大きく変化しています。また帰国当時は、国際理解教育の実践をしなければと思いつつ授業をしたり、いくつかの機会でお話などを多少させていただいたりもしました。ですが、この間、年数を重ねるごとに台湾についての知識も古くなり時代の要請も国際理解教育から外国語活動や外国語教育に移り変わる中、私自身の中でも日本人学校での出来事が占める割合が徐々に少なくなっていました。

しかし、今回、原稿執筆のため当時の資料をいろいろ探している中で、私が日本で在籍校や日本の知人に送っていた『イラ・フォルモサ』という台北通信を棚の奥から見つけ、もう一度読み返してみました。その内容の多くは当時の台湾や日本人学校についての紹介したもので、今となっては過去の資料やデータでしかありません。ただ、すべてを読み終えた後に、私自身が忘れかけていた何かに灯がともされた感じがしています。20年も前のものですから、その文章も稚拙で読み返して恥ずかしい部分もたくさんありますが、今の自分の礎になっている思いや考えはこの3年間の出来事や体験が大きく影響を与えていることに改めて気付かされた気がしています。そこで、本稿では台北日本人学校時代に今の私に大きく影響を与えた（と思える）三つの出来事を紹介することで、この文章を読んでいただいた方にふと立ち止まって世界やアジアの中での日本や日本人としての在り方を考えていただく材料になればと思っています。

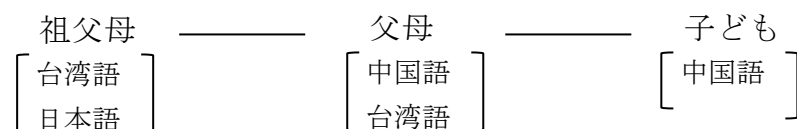
2 カタカナを使う台湾人

赴任して1年目、1学期間を終え多少生活にも慣れた頃、そろそろ現地の言葉を覚えたいと思い、先生方に相談しました。すると現地採用の先生だったと思いますが、地元の小学校で夜間に補習学校をしていることを教えてもらいました。しかも、教材であるテキスト（小学1年生レベルの国語の教科書）は無償でもらえるし、授業料も無料との話でした。効率的に習うなら、個別指導や少人数での指導の方がよいことは分かっていたのですが、国際交流の一環にもなるし現地の人々とも触れ合えるのではと思い、その補習学校に通うことにしました。

補習学校は、正式には「國民小學補修學校」と呼ばれており、19時から2時間程度の授業だったと思います。台湾の学校は9月始まりなので、補修学校もちょうど新年度が始まる時期で、タイミングとしてちょうどよかったわけです。一緒に派遣された先生と二人で近くの國民小學（小学校）に行くと、確かに電気のついている教室が

あります。教卓には指導者の先生がいて、その先生からテキストを受け取り、児童机に座って授業を受けることになりました。同じ教室内を見渡すと、70歳前後のお年寄りが席を並べて一緒に勉強していました。学習の内容は小学校の国語の授業とほぼ一緒で、先生がテキストを読み上げ、その後を生徒が読み、先生が文章の内容を説明するといったものでした。読むスピードもゆっくりで、これなら何とかついていけるかなと思えるものでした。しかし、中国語の発音は複雑で、一度聞いた程度では覚えられず、読み仮名をつけなければなりません。一生懸命に読み仮名を書こうとはするのですが、なかなかそのスピードについていけません。困って辺りを見回すと、やはり隣に座っていたおばあさんもついていけないのか、やや困り気味でした。ふとおばあさんの手元を見ると、中国語の読み仮名がカタカナで書いてあることに気が付きました。“あれ、このおばあさん、日本人なのかな？”と思いましたが、周りの人と談笑していた言葉は、明らかに日本語ではありませんでした。

しばらくして休憩時間になると、そのおばあさんが話しかけてきました。「あなたは日本人ですか？わたしも昔、日本人でした。」その言葉の意味が瞬時には理解できませんでした。しかし、私たちが日本人であることを知ると、周りのおばあさんやおじいさんがたどたどしい日本語で話しかけてきて、なぜその人たちがここにいるのかが理解できました。戦前の台湾は日本の統治下にありました。当時は日本政府による皇民化政策がとられ、台湾においても日本式の教育が行われていました。当然、使われる言葉は日本語であり、その普及にもかなり力が入れられたといわれています。しかし、終戦後、日本の統治が終わると台湾の人々の国籍は中華民国と変わり、一転して中国語が母国語となりました。それ以後、学校でも中国語が教えられ、それ以後の世代は中国語を話すようになります。そのため、親子3世代に、



と、このような図式が出来上がり、同じ家族でも祖父母と子どもで言葉が十分に通じないという現象もあると聞きました。また、テレビなども当然中国語が主体ですから年配の人にはテレビの内容すらよく分からない実態もあるとのことでした。

軽い気持ちで参加した補習学校でしたが、この場にいる人々の一生に日本という国が大きく関わっており、それは戦後数十年経っても決して昔の話ではないのだと身をもって実感した瞬間でした。

3 「9. 18」を忘れるな

同じ行為でも、「する側」と「される側」では明らかにその反応が違うことを痛感した事件があります。それが「9. 18事件」です。「9. 18」とは9月18日のことですが、この日には台湾のいたるところでデモが行われていました。「9. 18」のデモについて意識したのは、赴任して3年目のことですが、このデモは台湾でもニュースなどで大きく取り上げられていました。3年目ともなると、現地のニュースを見て

も多少は何を取り上げているのか分かるようになっていましたので、デモ行進する人たちが『9. 18を忘れるな』とプラカードなどを持って行進していることは分かっていました。その「9. 18」が日本と大きく関係していることを知ったのは、翌日のことで、日本人学校に行ってみると道路沿いの塀に卵が投げつけられた跡がいくつもあり、塀の外から投げ入れたと思われる猫の死体が校地内にありました。現地の先生に聞いて分かったのですが、9月18日は1931年のこの日、満州事変の発端となった柳条湖事件が起こった日だったのです。当時の日本軍が南満州鉄道を爆破し、それを中国軍の行為として出兵し、満州一帯を占領した柳条湖事件は、日本軍の自作自演であり、後に国際社会からも非難される事件です。

「9. 18」に関連して学校が被害に遭うようなことは私が赴任する何年か前まではあったようで、9月18日が近づいたら警戒するようにしていたらしいのですが、ここ数年はそんなこともなかったので安心していただけのことでした。小学校の社会科ではこの満州事変について取り上げますし、中学や高校の歴史の教科書では柳条湖事件のことも扱っていると思いますが、日本で一体何人の人が9月18日を意識することがあるのでしょうか？ちなみに7月7日も台湾では毎年ニュースになりますが、この日が何の日かお分かりでしょうか。勿論、七夕ではありません。1937年の7月7日に日中戦争のきっかけとなった盧溝橋事件がこの日に起こっています。



盧溝橋（北京市）

「過去を認識する」と言葉でいうのは簡単ですが、その傷を受けた人の立場になって考えることは難しいことだと感じたことを覚えています。

4 祈りの島

赴任して1年目に3年生を担当しました。小学校の先生方ならお分かりいただけるかと思いますが、3年生は社会科の学習で自分たちの住む地域の学習をします。その当時はさらに範囲を広げて、自分たちが住む市町の様子も学習していたように思います。台北日本人学校でも、学校がある地域の学習からさらに範囲を広げて台北市の学習をするため、スクールバスで市内の社会見学に出かけました。

見学場所の一つに龍山寺というお寺がありました。龍山寺は約300年前に大陸から移住してきた人たちが神の御加護と平安な生活が送れるようにと祈願して建立した寺院で、台北観光でも外せないスポットとなっています。また地元の人々からの信仰もあつく、一年中参拝者が絶えません。そんな歴史ある由緒正しい寺院の見学にと子どもたちを連れていくと、子どもたちだけでなく私までその雰囲気圧倒されました。その境内は人々の祈りで満たされ、祈りの気迫に圧倒されたのです。ちょうど雨上がりで石畳の地面はまだ濡れていましたが、そんなことを気にもかけず地面にひざまづき、何度もお辞儀してお祈りをする人。日本のものより長くて太い線香を両手で持ち、お百度参りのように本殿と門の辺りを行き来し、何度も頭を下げてはお祈りをする人。「ポエ」という二つで一組になっている三日月型の木を投げては、どのおみくじを

引けばよいか伺いを立てている人。境内のあちらこちらで繰り広げられる一心不乱の祈りの光景は、日本の神社仏閣では経験することのないものでした。神仏への信仰といえば、結婚式や葬式のときくらいしか意識しない私などとは違い、台湾の人の信仰心の厚さに深く心を動かされました。それ以降、暇に任せていくつかの廟（ミャオ：日本でいうお寺）を見て廻ったりそのいわれを調べたりするようになりました。

先ほど神仏と言いましたが、台湾では勿論神道はありませんし、信仰の対象は必ずしも仏様だけではありません。観音菩薩やお釈迦様が祀られている廟もありますが、中国の老子などを教祖とする道教への信仰も根強いものがあります。その道教の流れをくむ廟には、あの「三国志」に登場する関羽を祀ったものもあります。（日本でも横浜や神戸にある関帝廟は有名です。）この他にも、「学問の神様」と言われる孔子を祀った孔子廟も有名です。こうした廟は台湾全土いたるところにあり、その数は個人が建立したような小さなものまで合わせると九千とも一万とも言われています。その信仰に対する思いは、高齢者だけでなく子どもから大人まで皆共通です。願掛けのような願いから、先ほどのポエを使ってのおみくじでは会社の経営を左右するような判断までを占うというように、私からすると信じられないくらい生活に信仰が入り込み、多くの部分を信仰に委ねています。まさに“祈りの島・台湾”といった印象を受けました。

こうした様子を見て、私自身、信仰に対する考え方がずいぶん変わりました。その後の世界各地で起きる紛争や事件の多くには、宗教が関係しています。祈りをとても大切にしている人たちが信仰する神や信仰そのものを冒瀆されたなら、それが戦争へと発展する状況も理解できるようになりました。

5 終わりに

これらの出来事から、私は台湾や台湾の人々を通して日本を見つめ直し、現代史を学ぶことの重要性を強く感じました。同じ出来事であっても被害者と加害者とではその受け止め方がいかに違うかを思い知らされました。普段は親日的と言われる台湾の人々でも、心の奥底に眠っている感情に何かのきっかけで火がつくこともあることも知りました。また、当たり前のことですが自分の価値観がすべてではないという価値観の多様性を身をもって感じる事ができたのも、海外生活のおかげだと思います。

海外に出れば私たちだれもが、多かれ少なかれ国としての日本の過去や現在、そして未来を背負い、生活しているのだと思います。この感覚は、海外で直接人と人とのやりとりの中で肌で感じる部分が大きいと思います。できれば多くの人にこうした体験をしてほしいと思いますし、私自身もこの感覚をできるだけ海外に出かけることで磨き続けていきたいと思っています。